コラム

新島襄の函館脱国の謎～私の疑問と仮説 ―脱国ルートと同予想時間（私案）を含む

田　島　　繁

私は 2012 年 5 月、「新島襄の足跡を辿る」でいつも一緒の同志社教職員合唱仲間の畝目襄治氏と河村隆夫氏及び同大松井七郎ゼミの高橋正造氏（北星学園中高教諭）の 4 人で、「新島脱国ルート」を歩いた。私は新島が脱国した同じ時間に、同じルートを歩きたいと、同志社校友会・函館クラブ会長の浜谷信彦氏に頼み、5 月 9 日（水）午後 9 時案内して頂いた。

実地検証後、改めて『新島襄全集』8 巻 p.23 と p.24 及び『新島襄全集』10 巻 p.43 を読むと、以下の疑問が沸いた。

Ⅰ．新島がニコライの家を出たのは夜四つ半（午後 **11** 時）なのか。

Ⅱ．送別会は **6** 月 **14** 日（脱国当日）に沢辺（神明社宮司）の家で行われたのか。

Ⅲ．脱国日「漕ぎだしていくと岸には何千という光が見えた」（全集 **10 : 43**）「何千という光」とは何なのか。

これらの疑問について考察したのち、

Ⅳ．ニコライ邸～「海外渡航之碑」～ベルリン号までの脱国ルートとその予想時間

の私案を述べたい。

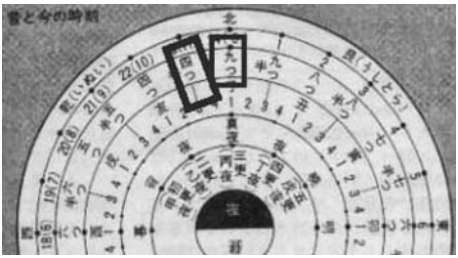
Ⅰ．ニコライの家を出たのは夜四つ半（午後 11 時）なのか

「6 月 14 日夜四ツ半（午後 11 時）③過…密かにニコライ①の家②を出て福士のもとに行く」（全集 8 : 24）と書かれているが、以下の 1）～5）の疑問が残る。

1）森中章光氏は著書「新島先生航海日記抄」（昭和 11 年）p.10 及び全集 5 : 37「航海日記」で「此夜九時過、密に宇之吉と共に小舟に乗し、米利堅商船に乗得たり」と述べている。
2）「ポーター商会④で（福士）宇之吉（のちの福士成豊）⑤と半時程も談判をなし」（全集 5 : 69-70）と書かれている。
3）「岸には何千という光が見えた」（全集 10 : 43）と書かれている。
4）「アメリカ船は岸からかなり離れた所に停泊」（全集 10 : 43）と書かれている。
5）「船頭（セイヴォリー）⑥と夜九ツ時（24 時）に彼の船に乗り込むべき由を約束せり」（全集 8 : 23）と書かれている。

①

②



③

④ポーター商会一番下の左

⑤

⑥

私の仮説 **A**

①ニコライの家を出たのは「夜四ツ半（午後 **11** 時）」では遅すぎる。

②森中章光著「新島先生航海日記抄」の「夜九時過、小舟に乗し（波止場を出発）」の方が妥当である。

森中章光氏は「新島先生航海日記抄」のはしがきで、「函館脱出の後の新島先生が、異国帆船の一船員としての繁激なる労働の間に筆或は鉛筆もて書き記されたる日記－和紙横綴 29 枚の小帳－があったという。しかし数十年たつ今日そんなものは何処を探しても見当たらぬ。が幸いなことに故新島公義氏の写しが故人の令息新島得夫氏の手元に大切に保管せられていた。本輯はすなわちこの唯一の写しに拠ったものである」と。すなわち、この「新島先生航海日記抄」が一番古く（昭和 11 年）、正確な記述である。

したがって、「新島先生航海日記抄」の「夜九時過、小舟に乗し（波止場を出発）」が妥当だと思う。

Ⅱ．送別会は 6 月 14 日（脱国当日）に沢辺（神明社宮司）の家で行われたのか

「6 月 14 日二三の信友と送別会を開く（か）。新島、慷慨のあまり剣を抜いて歌う」（全集 8 : 23）と書かれているが、以下の 1）～4）の疑問が残る。

1）「全集」執筆者も「送別会を開く（か）」（全集 8 : 23）と疑問符を付している。
2）「ニコライの家を出て、福士のもとに行く」（全集 8 : 24）と書き、沢辺の家に立ち寄りとは書いていない。
3）神明社⑦は夏祭りである。宮司の沢辺⑧は客の出入りでじっと立ち会えるか。
4）「脱国時の扮装図」⑨右：新島、左：塩田虎尾⑩こんな扮装で、脱国当日、ニコライの家から神明社へ、送別会が終わって、神明社から外国人居留地／ポーター商会に移動すれば、絶対に怪しまれる。

⑦

⑧

⑨

⑨拡大

⑩

⑪

私の仮説 **B**

送別会は緊迫する脱国当日ではなく、不要なものを売り払い、父民治に送る写真⑪を撮り終えた前日の **13** 日夜ではないか。夏祭りでない静かな神明社ではないか。

しかしながら、理由 1)、2）から仮説 B を撤回する。

理由 1） 同志社精神研究会の関口徹氏より「神明社の祭礼は 7 月 16 日（旧暦 6 月 13 日）であり、新島が脱国したのは祭礼の翌日 6 月 14 日である。6 月 13 日に祭礼の後片付けを終え、送別会は 6 月 14 日脱国当日、沢辺宅（神明社）で行われたと判断します」との指摘があった。

神明社の祭礼は 7 月 16 日であった。7 月 16 日（土）は「和洋暦換算事典」（下）で調べると、旧暦の 6 月 13 日、即ち脱国の前日であった。

山上大神宮（旧　神明社）	
所在地	北海道函館市船見町 15-1
主祭神	天照皇大神　豊受大神
創建	伝応安年間（1368 - 75 年）
例祭	7 月 16 日

文久 4 年・元治元年（甲子）354 日・西暦 1864 年閏

	1	2	③	4	⑤	⑥
1	2/ 8 月	3/ 8 火	4/ 6 水	5/ 6 金	6/ 4 土	⑦ 4 月
2	9 火	9 水	7 木	7 土	5 日	5 火
3	10 水	10 木	8 金	8 日	6 月	6 水
4	11 木	11 金	9 土	9 月	7 火	7 木
5	12 金	12 土	10 日	10 火	8 水	8 金
6	13 土	13 日	11 月	11 水	9 木	9 土
7	14 日	14 月	12 火	12 木	10 金	10 日
8	15 月	15 火	13 水	13 金	11 土	11 月
9	16 火	16 水	14 木	14 土	12 日	12 火
10	17 水	17 木	15 金	15 日	13 月	13 水
11	18 木	18 金	16 土	16 月	14 火	14 木
12	19 金	19 土	17 日	17 火	15 水	15 金
6月 13	20 土	20 日	18 月	18 水	16 木	16 土
14	21 日	21 月	19 火	19 木	17 金	17 日
15	22 月	22 火	20 水	20 金	18 土	18 月

新暦 1864年7月16日(土) → 旧暦 6月13日

理由 2）（全集 5 : 69）「函館脱出之記」（1864 年 6 月 14 日）の扮装図⑨に、大変読みにくい字で「予　塩田共に沢辺家ヲ出る図」（上右）と書いてある。また、その 1 行後に「予、塩田ト手を分ち、築島二於けるポルタの家（ポーター商会）④の辺りへ参りしかば」（全集 5 : 69）と書いてある。

私の疑問は「送別会は 6 月 14 日（脱国当日）に沢辺（神明社宮司）の家で行われたのか」ということである。新島は 6 月 14 日（祭礼の翌日、脱国当日）、塩田と沢辺の 3 人で、沢辺（神明社宮司）の家で送別会をもったと理解し、私の仮説 B を撤回する。

＊神明社（今の函館消防署西出張所付近）は函館大火災で焼失し、明治 7 年現在の場所（⑦）に移設し、山上大神宮と改称した。

Ⅲ.「漕ぎだしていくと岸には何千という光が見えた」祭礼は終わっているのに、なぜ新島は「何千という光」を見たのか

「漕ぎだしていくと岸には何千という光が見えた。人々は異教の神の祭礼を祝っていた」（全集 10 : 43）と書かれているが、

①竹内力雄著『新島襄の扮装』（p.10-14）によると、『私の青春時代』の中の「漕ぎだしていくと岸には何千という光が見えた」は脱国 21 年後、ハーディ夫妻への書簡であり、記憶も薄れ、新島の「潤色癖の例」かと。脱国時の夜 11 時過ぎに「何千という光」は考えられないし、無理がある」と思われる。

②私は 6 月 14 日の第一部門研究会で On Line で発表したが、翌月発表の三好彰氏からその光は「賑わっていた遊郭の光」ではとの指摘があった。

③本井康博著『マイナーなればこそ　新島襄を語る（九）』p.260 L 9-10 によると、「最後の福士は、新島をベルリン号に小舟で運ぶのに、えらく慎重でした。前の晩に試運転をしたとも、（八重の回想ですが）「三日間も小舟の漕ぎ方を練習していた」（同前）とも、伝わっている。その根拠は④である。

④「上毛教界月報」274 大正 10 年 9 月 15 日発行によると、「新島八重子刀自のご来安（中）8 月 28 日礼拝にご参列次いで別館にて歓迎会を催す。奥様は「海外に脱出に就いては当時函館の英人の商館に在りし福士宇之吉氏が襄の志を賛成して百方周旋小舟に載せて本船迄送る為 氏は三日間特に操舟の練習をせられ 襄を船底に潜ましめ幕吏の見張線を通過する時何者ぞと誰呵せられしも氏は何気なく福士であります。忘れ物をして本船に取りに参りますとて通過し本船に上らんとする時も船長の注意にて幕吏が望遠鏡にて監視し居るを避けん為反対の側より上がったそうでありました。…後ち夫婦

して函館に参りし時襄は私を港に連れ行き此処は足音のせんことを恐れて雪駄を脱ぎし所なり。此処より小舟に乗ったなど一々指点して当時の光景を説き聞かせました。（奥様今年御齢七十七）」

⑤私は本井康博先生の考え（前の晩に試運転した）に同感である。③の「最後の福士は、新島をベルリン号に小舟で運ぶのに、えらく慎重でした」、ならびに「前の晩に試運転したとも」は「八重の回想ではなく、本井康博の判断」と、本井先生は言われた。

6 月 12 日「函館の築島に於ける米利堅人の家に而、同国商船の船頭ウイルレム・セーウオルなる者に逢ひ…14 日の夜九つ時迄に彼の船に乗込むべき由を約束せり」

6 月 13 日　家へ送るため写真を撮る。

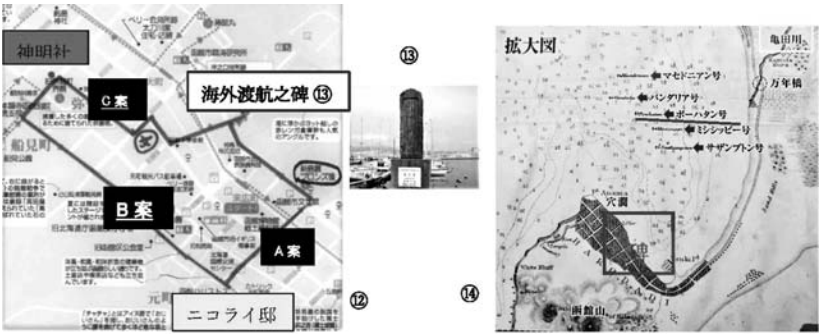
6 月 14 日（陽暦 7 月 17 日）この日「二三の信友」と送別会を開く（か）。新島、慷慨のあまり剣を抜いて歌う。

「福士は三日間操舟の練習をせられ」は、1 日目は自分自身で行い、2 日目は実際に襄を乗せて行われた。3 日目は本番であった。「2 日目（6/13）の同時刻に襄を乗せて練習をした」という本井先生の判断に私も同感である。「命がかかっている」。6 月 14 日（脱国当日）だけでなく、6 月 13 日前日の練習は当然ありうる。

6 月 13 日「漕ぎだしていくと岸には何千という光が見えた。人々は異教の神の祭礼を祝っていた」（『私の青春時代』）とぴったり合う。竹内力雄氏の「新島の潤色癖の例」ではなく、「新島の実景」だと思われる。

⑥私の疑問は「岸には何千という光が見えた」何千という光とは、である。答えは新島は脱国の前の夜（6/13、神明社の祭礼の日）に、福士の小舟に乗って沖に出た。「漕ぎだしていくと岸には何千という光が見えた」は新島の実際に見た光景だと思われる。

Ⅳ．ニコライ邸～「海外渡航之碑」～ベルリン号（ポーハタン号）までの脱国ルートと予想時間（私案）



新島渡航碑とペリー艦隊ポーハタン号位置

Ⅳ-1. 脱国の前夜（**6/13**、操舟練習）**A** 案　約 **1 Km**　**15** 分

函館ハリストス正教会（ニコライ邸）→八幡坂→新島襄ブロンズ像→外国人居留地、ポーター商会（海外渡航之碑）

Ⅳ-2. 脱国の日（**6/14**）ニコライ邸→元町公園→神明社（**B** 案）→弥生小学校→ポーター商会（**C** 案）

ニコライ邸→（**1 km 15** 分）→神明社（送別会）→（**800 m 12** 分）→

午後 **7** 時過　　**7** 時半～**8** 時過

ポーター商会（卯之吉と半時間程）

8 時半　（雪駄を取りに、熱いレモネード）

「同志社大学函館キャンプ」を 30 回程案内した浜谷信彦氏は神明社から弥生坂まで直進、左折し一筋下の函館元町ホテル前を行き、東坂の交差点で左折、ポーター商会（碑）まで下りて行った。

Ⅳ-3. 波止場（海外渡航之碑）発～小舟（櫂で）～
9 時過　　**約 2 km（20 分）**

ベルリン号（⑭のポーハタン号付近と仮定）
9 時半頃着

ベルリン号の碇泊位置について函館港湾事務所や函館市中央図書館等に問い合わせたがダメであった。だが、図書館員よりペリー艦隊の碇泊位置を教えて頂き、ペリー艦隊が碇泊した⑭のいずれかと思われた。

しかし、次頁ア）續家家系図の次男、福士卯之吉の姪（續トセ 1 代目）が始めた「五島軒」の 4 代目、若山直社長（今年 9 月会長に）から私の質問に答えて次のような手紙を戴いた。（2021.10.19）

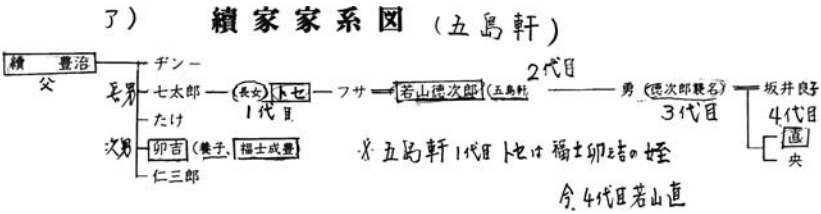
> 「福士は婿養子、生まれは続豊治の息子ですが、ポーター商会勤務で英語は堪能、後に「函館英学」を広めて函館初代測候所長になった。ちなみに武田斐三郎と親しく、新島の脱出の際には、ベルリン号船長に根回し、船賃や乗船後の心得、脱出の際の万が一を考えて対策を練った。函館奉行は後にフランスと条約もないのに実行寺にシビル号の患者 80 名の養生を許可した開明家だったが、港湾管理人に見つかれば処刑するしかない。伝記によれば、沖どまりのベルリン号は小舟でも直行なら 10 分程度の距離に停泊中だったというが、船底に新島を隠し、単独で「夜釣り」を装いつつ漕いだというから、たっぷり時間をかけたはず。深夜だがベルリン号への乗り組みは容易だった。」

「ポーターからの根回し、卯之吉の案内、奉行の「黙認」がすべてそろっていた。但し、国禁を冒した場合は処刑なので、緊張はしたはずである。福士家には明治 15 年春に再会した新島と福士が並んだ写真がある。父の徳次郎が所蔵しており『北の文明開化～函館事始め百話』に掲載した。脱出のシーンは小説「蘆火野」船山馨著（資料提供・徳次郎）に描かれた通り。明治 15 年頃になるまでは国禁に関することは「口止め」されていた。外国船舶の停泊位置はペリーのポーハタン号、フランスのシビル号と同じ位置だっ

たことは確かだ。日本の千石船は港に近く、外国船は遠い位置だが、これは船体の大きさと、はしけの往復の為だ　若山直　拝」

「ペリー艦隊のペリーは、1854, 4.15 旗艦ポーハタン号に箱館奉行など 60 余名を招待し、祝賀会を開いた」（道南文化センター主催　五島軒所蔵作品鑑賞講座、若山直講師）。「ペリー提督歓迎上陸碑」が万代埠頭（亀田）の万代町にある（下の写真）。

ベルリン号など外国船舶もポーハタン号の近くに碇泊していたと推察される。「新島の海外渡航碑」から約 2 km の距離である。「アメリカ船は岸からかなり離れた所に碇泊していたので、そこまでたどり着くのに相当な骨折りを必要とした」（全集 10 : 44）。新島が船底に隠れて、福士が真夜中櫓をこいで行くには相当な力がいったであろう。20 分程度はかかったのではないか。若山直氏の函館博物館友人学芸員も「まあそんなところでしょう」とのことであった。



⑮洗濯衣類をマスト一面に干す

⑯万代埠頭にあるペリー上陸記念碑

⑰亀田川で洗濯する風景

⑱地引網で魚をとり食べる

V. まとめ

疑問 1：ニコライの家を出たのは「夜四ツ半（午後 **11** 時）」ではない。
森中章光著「新島先生航海日記抄」の「夜九時過、小舟に乗し（波止場を出発）」が妥当である。

疑問 2：脱国当日に沢辺の家で送別会をもったと理解した。

疑問 3：「数千の光」は、新島が前夜の操舟の練習で、船から実際に見た光景と思われる。

疑問 4：「ニコライ邸～海外渡航之碑～ベルリン号までの脱国ルートとその予想時間」について、私の考察を提示した。

願望として、この脱国ドラマが詰まった函館に、「新島襄千里の志記念館」（仮称）を、同志社 150 年記念事業として、函館市と協力して実現できないかと強く願う。

（**資料 1**）坂本竜馬の従弟、沢辺数馬のこと

菅沼精一郎が新島襄をニコライ神父や沢辺数馬に紹介した。沢辺数馬が新島を福士卯之吉に紹介。また、新島のため自宅（神明社）で送別会を開催した。（『現代語で読む新島襄』p.285）

（資料 **2**）

薬師山／函館山から湾内のペリー艦隊 5 艘を見る
函館市中央図書館　デジタル資料館「古文書・地図」
「ペリー提督日本遠征記挿絵」

参考文献

1）新島襄全集編集委員会『新島襄全集』5 巻、7 巻、8 巻、10 巻（同朋舎出版、1984 年、1996 年、1992 年、1985 年）
2）学校法人同志社編『新島襄－その時代と生涯』（1997 年 3 月）
3）森中章光『新島先生航海日記抄』（同志社校友会、昭和 11 年 4 月）
4）写真⑧は国立国会図書館ウェブサイト「近代日本人の肖像」より転載
5）釣　洋一『和洋暦換算事典』（新人物往来社、1992 年 9 月）
6）柏木義円編『上毛教界月報』274（不二出版、大正 10 年 9 月 15 日）
7）本井康博『マイナーなればこそ　新島襄を語る（九）』（思文閣出版、2012 年 2 月）
8）竹内力雄『新島襄の扮装－女装説と函館の環境－他』（蒼穹社、平成 27 年 3 月）
9）現代語で読む新島襄編集委員会『現代語で読む新島襄』（丸善、2000 年 11 月）
10）⑭は函館市中央図書館　デジタル資料館「古文書・地図」
11）五島軒・若山直『五島軒 120 年のあゆみ』（長門出版社、1999.9.18）
12）田島繁『新島襄の足跡を辿る　仲間と共に海外国内 15 コース』（北斗プリント社、2019.11.3）
13）船山馨『蘆火野』（河出書房新社、昭和 50 年 7 月）
14）写真⑮～⑱は若山直氏より提供